

505 Bacterial vaginosisに関する細菌学的、臨床的検討

江東病院 産婦人科
松田静治, 鈴木正明

目的：産婦人科領域で頻度の高い膣炎のなかで Bacterial vaginosisすなわち非特異性細菌性膣炎は今なお未解決の問題が多い。本疾患の主役と考えられる *Gardnerella vaginalis* と嫌気性彎曲桿菌 (*Mobiluncus* sp.) について分離状況と治療ならびにその意義を検討した。

方法：帯下患者の膣内容を対象に各種性状検査，鏡検，アミン臭検出，clue cell 検出，一般細菌培養を行うとともに Columbia 培地，Brucella RS 培地を用い，*Gardnerella vaginalis* (G.V) と *Mobiluncus* (M) の検出，同定を試み併せて各種抗菌剤に対する感受性試験を行うとともに治療法を検討した。

成績：220例の帯下患者より G.V と M をそれぞれ 11.1%，3.0% に分離し，このうち膣炎 (95例) からの分離率は 18.9%，4.2% である。G.V と M の分離例では灰色帯下，膣内 pH > 5，およびアミン臭検出と clue cell 陽性など興味ある特徴が認められた。またグラム染色上の *Lactobacillus* の減少，消失と G.V と M の検出には相関がみられ，メトロニダゾール (MNZ) 内服と CP 膣錠いずれの投与群でも治療後，自他覚所見の改善，消失をみた。両分離菌 (34株) の 12 種の抗菌剤に対する感受性成績を比較し，CP，MNZをはじめ ABPC，CLDM，MINO，OFLX，Cephem 剤などで MIC 1.56 μ g/ml 以下のものが大部分であった。これらの結果をもとに膣炎に対する治療法を提案した。

結論：帯下患者の細菌学的検討により G.V と M が Bacterial vaginosis の主要な原因菌と考えられ，その病態，検査法と治療法を指摘した。

506 風疹初感染及び再感染時の風疹抗体価の変動と妊娠中後期風疹胎内感染について

石川県立中央病院
干場 勉, 北村修一, 西本秀明, 朝本明弘, 矢吹朗彦

〔目的〕風疹の感染時期推定の研究としてワクチン接種例のウイルス特異的 IgM，IgG 抗体の推移については第 37，38 回本学会で報告したが，今回は自然感染者の抗体価を長期間観察し前研究と合わせ妊娠初期の不顕性感感染診断への応用と妊娠中後期胎児感染の影響，及び再感染について検討した。〔方法〕風疹初感染 36 例，HI 抗体価の上昇した再感染 15 例のシリーズ血清，妊娠 18～38 週で母体感染のあった 14 例の新生児臍帯血清及び尿を対象として抗体価測定とウイルス分離を行った。風疹 IgM 抗体価は抗ヒト IgM モノクローナル抗体を固相化した IgM 捕捉法，IgG 抗体は間接法による酵素免疫測定法を，ウイルス分離は VERO 細胞を用いた。〔成績〕風疹 IgM 抗体は発疹出現日より既にみられ，7 病日前後で最高値に達した後下降し 40 病日頃から陰性化し始めたが 187 病日でも陽性の症例が見られた。IgG 抗体上昇はより緩慢で 1～4 か月で最高値に達し，ワクチン投与時と同じく両抗体価の解離する現象が観察された。IgM 抗体は再感染例中 2 例，また妊娠後期母体感染の 2 児より検出されたが，新生児全例がウイルス分離は陰性で正常児であった。更に中学校での定期接種経験者にも初感染例があった。〔結論〕妊娠初期に高 HI 抗体価を呈し不顕性感感染を疑う妊婦に対しては風疹 IgM 及び IgG 抗体を経日的に測定しその変動を比較することで判定し得る。しかし IgM 抗体が長期に存在する例や IgM 抗体陽性再感染例ではその診断が困難な場合がある。また妊娠後期母体感染でも胎児感染は成立する。更にワクチン接種者でもやはり妊娠前の抗体価検査は重要である。